

パースの時代・西田の場所 ―連続と断絶のはざまから―

石田正人

プラグマティズムは、科学者・論理学者・哲学者パースによって生み出され、同時代のジェイムズやロイスの力を借りながら、アメリカ哲学の主要な相貌へと発展した。時代的にみると、古典的プラグマティズムは、西田の生年前後にパースによって準備され、およそ西田の山口高等学校時代にジェイムズの活躍も得て頂点に達し、西田の京都帝国大学時代が始まる頃にその黄金期を終えた。西田の旺盛な執筆活動は、むしろ次の世代のデューイの活動期と重なっている。他方、来日したデューイの講演へ足を運んだ西田がデューイから影響を受けた形跡は乏しく、かえってパースと西田幾多郎に哲学上の共通点が多い。

『善の研究』はパースの没年に出版されているが、西田とパースが軌を一にする哲学上の見解は少なくない。たとえば西田は、精神の統覚作用は自然界における無機物の結晶にも現れるというが、パースも純粋な物理的な世界のなかに思考作用が現れると考える。また人間が共同生活を営むところには、各人の意識を統一する社会的意識があると西田は論ずるが、パースもまた社会における人間の集まりは、それ自体が緩やかに結合された人格であるとみなす。両者とも広義のカント主義者であり、個々の経験的自我に縛られない統覚作用において世界をみる点で類似しているが、これに加えて、西田とパースには数理および論理への本質的な関心があることに本報告は注意を向けたい。

そこで論理学史のなかでみると、パースは、フレーゲと共に現代論理学のパイオニアとして知られ、数理哲学に対しても独自の見解をもっていた。前者に関しては、パースは古典述語論理を整備したことで名高く、後者に関しては、自身の宇宙論的形而上学がヘーゲルの形而上学と類似することを認めつつも、微分方程式の視点から事物に内在する連続性を捉える視点を打ち出している。さらに、数学は論理の基礎づけを必要としない、と考える点において、パースは論理主義と相容れない立場をとった。一方、西田は、精神現象の特徴づけ、すなわち内面的関係の説明において、カントールやデデキントに由来する無限、連続、極限、順序型といった現代数学の概念を援用し、具体的経験にあっては、数理がむしろ論理の根元であるとみる点で、パースと興味深い類縁性を示している。ヒルベルトの公理主義に対して、西田が懐疑的であったのは偶然ではないと考える。

他方、パースと西田には相違点もみられる。パースは、物質と精神の連続性を強調し、物質を内側からみてその直接の特性を感情とみるならば、それは意識現象として現れるというが、西田は直ちには同意しない。外面的な物質的關係には、統覚作用の極限が必ずしも含まれてい

## 西田哲学会第 21 回年次大会 シンポジウム要旨

ないと西田は考えるからである。時代的な断絶もある。相対論や量子論の考え方にふれることができた西田に対して、パースはそのような機会をもたなかった。戦争の影が色濃くなるなか、西田の視線は危機に立つ現実の社会へも向けられたが、パースの社会的関心は限定的である。本報告では、このような時代背景や思想家としての個性の違いを踏まえつつ、両者の哲学的な遠近を検討し、現代のプラグマティズムと西田哲学がいかなる接点をもちえるか、についても若干の考察を試みたい。